

東日本大震災 震災復興支援情報誌

# TSUNAGARI通信

Vol.9 一般社団法人つながり

発行//3月20日

## 忘れてはいけない日 2011年3月11日

東日本大震災から6年が経ちました。七回忌をむかえた今、あの日起きたことを後世に残すべく、私たちボランティア団体つながりでは今年も3月11日に南三陸町歌津にて行方不明者捜索と法要を行いました。

午前中の捜索ではダイバー達が海の中から財布を見つけ、陸では名前の書かれた服などを見つける事が出来ました。

集まった皆さんの想いの元、毎年必ず手がかりになるかもしれない物を見つけ出す事が出来ています。

午後からの法要は、ボランティアと地元の方を併せ140名以上の方が集まり、中山漁港にて厳かに行いました。

船で沖に出て、14時46分に船上での黙祷と献花を震災で亡くなられた方に捧げました。

涙を流しながらも献花を手向け、船の上で海をジッと見つめている地元の方の姿がありました。

また前日の3月10日には、キャンドルナイトを行いました。6年前の3月11日と同じ様に雪が降る中の開催となり、参加する方すべての想いがより一層強くなり、震災で母親を亡くした当時小学五年生の女の子の話に耳を傾け、涙を流しました。あの日から何年経とうと決して消えることのない記憶。「こんな風に雪が降ると、嫌でも思い出してしまう。忘れたくても忘れられない」と仰っている地元の方がいました。

震災から6年。自分の周りの人達への感謝を忘れぬように。当たり前が当たり前ではないという事を心に刻む事が出来ました。震災から6年経った今もこうした活動が行えるのは、地元の方からのボランティアに対する感謝の気持ちがいまでも強くあることや、当団体が行っている街頭募金に対してご理解いただけている皆様がいてくれるおかげだと感じます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。



## ～女川町出身の高校三年生の語り部～

当時、小学6年生の私は卒業を目の前にし、新しい一步を踏み出す気持ちに満ち溢れていました。中学校はどんなところだろう、そんな事を思う毎日でした。授業が終わり放課後には卒業式の練習をしていました。もう少しで帰れる、そう思った時です。東日本大震災が起こったのです。最初はいつもあるような地震だと軽く考えていました。でも先生から「保護者が来ないと帰れない」そう伝えられました。一気に不安と恐怖に包まれました。いくら待っても迎えは来ません。友達が一人、また一人帰って行くのを見送る事しか出来ませんでした。その日も次の日も迎えは来ませんでした。どうなるか分からない明日に怯えました。3日目のお昼に祖父が迎えに来てくれました。そして震災から5日後、私と祖父は女川町の中心部を見に行きました。ビルは倒れ、車と電車はひっくり返って、いつも見ていたあの女川町は姿を変えていました。絶望的でした。周りを見渡すと流された家の跡から探し物をしている人がいて、写真を抱きしめて泣いていました。行方不明者の中にわたしの親戚も含まれています。震災で沢山の大切なものを失いましたが、それだけではありません。震災から学んだ事、それは命の尊さです。

一昨年 TSUNAGARIの一人として水害被害があった茨城県常総市でボランティア活動をしました。そこで感じたのは年齢や性別、職業、学力等とは関係なく大切なのは「誰かの為に」という気持ちだということです。同じ想いをもって動けば大きな力となると思いました。それから私は夢を見つけました。それは児童養護施設で働く事です。私も児童養護施設で育ち周りにバレルのが怖くて、信頼できる友達にしか言っていない。しかしある時親友に環境はそうでもあなたはあなたでしょと言われて凄く嬉しくなりました。隠さずに本当の自分であることはこんなにも楽なんだと思い、同じ思いをしている子供にも伝えたいと思いました。今夢に向かって一步を踏み出しました。今までいろんな事があって、沢山の方と出会い支えられ、沢山の勇気をいただきました。この全てが今の私をつくってくれたのだと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。誰もが分からない未来と一緒に考え行動にしていきたいと思います。

語り部の様子 →

